

ウズベク語の動作名詞について

日高 晋介

(東京外国語大学大学院／日本学術振興会特別研究員 DC)

キーワード：ウズベク語，動作名詞，派生，屈折

1. はじめに

本稿では、ウズベク語の動作名詞が派生であるのか屈折であるのかという問題について議論する。Koptjevskaja-Tamm (1993: 5) による定義に従った動作名詞形成接辞は、*-(i)sh, -maslik, -moq, -(u)v* の 4 つが挙げられる。Кононов (1960: 115-118) と Sjöberg (1963: 70-71) では、これらの接辞によって作られた動作名詞を「名詞」あるいは「派生」名詞として記述している。Bodrogligeti (2003: 569) は *-(i)sh, -(u)v* を「語彙の一部」、*-moq, -maslik* を「動詞屈折」に属するとしている。本稿では、Malchukov (2006) の二つの階層（動詞の脱範疇化階層と名詞への再範疇化階層）を用いて、4 つの動作名詞が「語類転換屈折 (Word-class-changing inflection)」(Haspelmath 1996) であると結論付ける。

本稿は次のように構成されている。まず以下の小節 (1.1 節と 1.2 節) ではウズベク語に関する基本情報と動詞と名詞の形態法について概観する。第 2 節では、Koptjevskaja-Tamm (1993: 5) による「動作名詞」と Haspelmath (1996) による「語類転換屈折」について概観する。第 3 節では、Malchukov (2006) の二つの階層をウズベク語の動作名詞に適用する。そして、第 4 節で結論を述べる。

なお、本稿の例文番号、日本語訳、グロスはことわりのない限り、筆者によるものとする。本稿のウズベク語表記はラテン文字正書法を用いる。

1.1. 基本情報

ウズベク語の話者人口、話される地域、音韻的特徴と類型論的特徴を以下に挙げる。以下の記述は庄垣内 (1988: 829) を要約したものである。

ウズベク語はチュルク語の 1 種である。主にウズベキスタン共和国内で話される。他にカザフ、キルギス、タジク、トルクメン、カラカルパクといった隣接する共和国内、中国の新疆ウイグル自治区東部やアフガニスタン北部にも広く分布している。ウズベキスタン共和国内の話者数は約 1227 万人 (1979)、中国では 13, 810 人 (1982) が記録されている。東方またはチャガタイと呼ばれる言語グループに属し、新ウイグル語ともっとも近い関係にある。子音音素は 36 個、母音音素は 6 個であり、母音調和は行われぬ。基本語順は SOV 語順であり、接尾辞と後置詞によって文法範疇が表現される。(庄垣内 1988: 829 要約)

1.2. ウズベク語の名詞形態法と動詞形態法

ウズベク語の名詞形態法を次に挙げる。―は接辞境界を表す。

(代) 名詞語幹―複数 (-lar) ―所有人称―格

それぞれ表 1 と表 2 に、所有人称接辞と格体系を挙げる。対格は、それが付く名詞が定である場合 *-ni*、不定である場合何も付かない。

表 1: ウズベク語の所有人称接辞

	単数	複数
1 人称	<i>-(i)m</i>	<i>-(i)miz</i>
2 人称	<i>-(i)ng</i>	<i>-(i)ngiz</i>
3 人称	<i>-(s)i</i>	

表 2: ウズベク語の格体系

	形式
主格	なし
対格	<i>-ni</i> /なし
属格	<i>-ning</i>
与格	<i>-ga</i>
処格	<i>-da</i>
奪格	<i>-dan</i>

次に動詞形態法を表 3 に挙げる。

表 3: ウズベク語動詞形態法

動詞語幹					
語根	派生接辞			屈折接辞	
	(態)	(可能)	(否定)	定動詞接辞	述語人称接辞
				形動詞接辞	
				動名詞接辞	
				副動詞接辞	

ただし、形動詞と動名詞の場合、名詞と同様に、形動詞接辞と動名詞接辞の直後に複数接辞、所有人称接辞、格接辞を付すことができる。これについては 3.2 節で詳述する。

以下の表 4 に派生接辞の一覧を挙げる。

表 4: 派生接辞一覧

機能	接辞	例	
態	使役	- <i>Dir</i> - <i>Giz</i> - <i>Gaz</i> -(<i>i</i>) <i>z</i> -(<i>i</i>) <i>t</i>	<i>top-tir</i> - 「見つけさせる」 <i>yot-kiz</i> - 「寝させる」 <i>ko'r-gaz</i> - 「見せる」 <i>oqi-z</i> - 「流す」 <i>qayna-t</i> - 「煮る」
	受動	-(<i>i</i>) <i>l</i> -(<i>i</i>) <i>n</i> (<i>l</i> を含む語幹)	<i>o'qi-l</i> - 「読まれる」 <i>alda-n</i> - 「騙される」
	相互	- <i>sh</i>	<i>ur-ish</i> - 「戦う」
	中動	-(<i>i</i>) <i>n</i>	<i>qash-in</i> - 「自身をひっかく」
可能	- <i>ol</i> -	(Boeschoten 1998: 364 に用	
否定	- <i>ma</i>	例なし)	

(Boeschoten 1998: 364 を基に筆者作成)

2. 「動作名詞」と「語類転換屈折」について

本節では、本稿で用いる重要な概念である「動作名詞」と「語類転換屈折」について、それぞれ 2.1 節と 2.2 節で説明する。

2.1. 動作名詞について

本稿で扱う動作名詞の定義は以下に掲げる Koptjevskaja-Tamm (1993: 5) による定義に従う。

1. 動作あるいは過程を表す一般的意味を持つ
2. 非派生名詞と同じように前置詞や後置詞を取ることができる
3. ある程度の生産性を示す。

上記の 3 つの定義に当てはまるのは、次の 4 つの出動名詞であると考えられる(Кононов 1960: 115–118, Sjöberg 1963: 70–71, Bodrogligeti 2003: 212–223, 226–227, 570–575)。以下の例は「だますこと」(*alda-maslik* は「だまさないこと」)を表す。

(1) *alda-sh*, *alda-maslik*, *alda-moq*, *aldo-v*

しかし、これらの名詞形成接辞の分類については、先行研究ごとに見解が異なる。Кононов (1960: 115–118) では、出動名詞を「名詞形態論」で取り扱っている。つまり「名詞派生」と捉えていると考えられる。Sjöberg (1963: 70–71) では、派生名詞としている。Bodrogligeti

(2003: 569) では、*-(i)sh*, *-(u)v* は「語彙の一部」であるとしている。つまり「名詞派生」と捉えていると考えられる。それに対して *-moq*, *-maslik* は「動詞屈折」に属するとしている。ただし Bodrogligeti (2003: 212–222) では、これら四つの動作名詞を「動詞語幹からの派生」であるともしている。ただし、Bodrogligeti (2003) には、何を基準にして「派生」あるいは「屈折」としているのかは明確に記述されていない。

以上の先行研究の記述を表 5 にまとめる。表中の「意味」と「生産性」についての情報は Bodrogligeti (2003: 212–222) の記述による。ただし、Bodrogligeti (2003: 221) では、*-(u)v* は否定、可能、不可能を表す語幹ではより少ない頻度で現れるとの記述がある

表 5: 先行研究による動作名詞の分類

	意味	生産性	Кононов (1960)	Sjoberg (1963)	Bodrogligeti (2003)
<i>-(i)sh</i>	動作／過程	高	派生	派生	派生
<i>-(u)v</i>					
<i>-moq</i>			記述なし	記述なし	派生／屈折
<i>-maslik</i>					

これらの動作名詞が「派生名詞」であると考えた場合、対格名詞句をとりうるなど動詞的性質が残されているため、問題が残る。一方で、「動詞屈折」であるとした場合も、非派生名詞と同じように複数接辞・人称接辞・格が接続しうるため、問題が残る。

2.2. 語類転換屈折について

Haspelmath (1996) では、「派生は品詞転換を伴い、屈折は品詞転換を行わない」という定説に対し、「品詞転換を行う屈折は存在する」という主張を展開している。以下のレズギ語の例では、*q̄arağ-un*「起きること」に能格が接続するという名詞の形態統語的ふるまいを見せている。その一方で、*q̄arağ-*「起きる」が絶対格動作主 *wun* [you:ABS]を持つ、副詞で修飾ができるというような動詞の形態統語的ふるまいが保持されている (グロス・英訳は Haspelmath 1996: 44 による。MASD はアラビア語学でいう *masdar*「動名詞」を表している)。

(2) Lezgian (Haspelmath 1996: 44)

wun fad q̄arağ_v-un_N-i čun tažub iji-zwa
 [you:ABS early get.up-MASD-ERG] we:ABS surprise do-IMPF
 'That you are getting up early surprises us.'

Haspelmath (1996) は、上記のように動詞の内的統語論を保持しながらも、名詞の外的統語論も獲得しているような現象を「語類転換屈折」とみなしている。

それでは、Haspelmath (1996) のいう「屈折」とは何を指しているのだろうか。Haspelmath (1996: 47) では、屈折と派生を以下のように定義している。

(3) 屈折と派生の定義：

ある形式が、規則的・一般的・生産的であればあるほど屈折的であり、
ある形式が、不規則・不完全・不規則であればあるほど派生的である。

(Haspelmath 1996: 47)

さらに、上の定義によれば、「規則的・一般的・生産的」である (2) の *wun fad q̄arağ-un-i* は屈折形式であることは疑いないと述べている (Haspelmath 1996: 47)。

本稿では、Malchukov (2006) で提案された二つの階層に従って、動作名詞の名詞的性質・動詞的性質について、実例を挙げながら検証する。結論として、ウズベク語の動作名詞は動詞的性質を保持した「語類転換屈折」(Haspelmath 1996) 形式であることを示す。

3. Malchukov (2006) による階層の適用

本稿では Malchukov (2006) の階層を用いることで、ウズベク語の動作名詞がどれほど動詞的性質を保っているのか、名詞的性質をどれほど獲得するのかについて考察する。

まず以下にウズベク語の文法に適合させた Malchukov (2006) の階層を示す。名詞への再範疇化階層では、ウズベク語にはない、限定詞 (DET) と類別詞 (CL) の範疇を削除している。

動詞の脱範疇化階層： -VAL >> -VOICE >> -ASPECT >> -TENSE >> -MOOD >> -AGRs >> -IF

名詞への再範疇化階層： -CASE >> -POS >> -NB

以下の小節では、コーパス・Web 検索¹を用いて用例を抽出する。先行研究で挙げられている用例も用いる。

3.1. 動詞の脱範疇化階層

動詞の脱範疇化においては、TAM は保持されないが、結合価や態は保持される。比較の為に、屈折要素であると考えられる形動詞² (Кононов 1960: 238–239, Sjoberg 1963: 95–96, Bodrogligeti 2003: 616–638) と比較する。

3.1.1. 結合価が保持されている例

まず屈折要素である形動詞の例を挙げる。以下、対格項に囲み線、形動詞あるいは動作名詞接辞に下線を付している。

¹ *Ozodlik Radiosi* (<http://www.ozodlik.org/>) ニュース記事を基にしたコーパス (約 302 万語)。Web 検索で用いた用例は 2014/03/24 が最終閲覧日である。

² 形動詞には *-gan* [PST], *-(a)yotgan* [PRS], *{-a/ -y}digani* [NPST] という形式が存在する。名詞的用法、連体修飾用法、定動詞用法がある (Кононов 1960: 238–9, Sjoberg 1963: 95–96, Bodrogligeti 2003: 616–38)。本稿では、最もよく見られるであろう *-gan* の用例のみ挙げる。

- (4) *men... [ovqat-i-ni] ye-gan-im yo'q.*

1SG meal-3SG.POSS-ACC eat-PTCP.PST-1SG.POSS no

「私は (中略) その料理を食べたことがない。」

(<http://forum.islom.uz/smf/index.php?topic=20208.25>)

次に、対格項が保持されている動作名詞の例を示す。4つの動作名詞全てで対格項が保持されていることが確認できる。

- (5) *men u-ni [o'z ish-i-ni] shu qadar puxta [bil-ish-i]...*

1SG 3SG-ACC REFL work-3SG.POSS-ACC that like skilled know-NMLZ-3SG.POSS

「私は彼を、彼が彼自身の仕事をそのようによく知っていること…」

(Bodrogligeti 2003: 572)

- (6) *Eshmurod [amaki-m-ni] uyg'ot-ib yubor-maslik] uchun...*

PN uncle-1SG.POSS-ACC waken-CVB send-NMLZ.NEG for

「エシムロッドは私のおじを起こさないように…」 (Bodrogligeti 2003: 575)

次の (7) では、名詞句に何も付されていないが、統語的環境から対格名詞句であると判断できる。表2を参照されたい。

- (7) *[u qishlog'imiz-ga [elektr] ol-ib [kel-moq] uchun...*

3SG villege-1PL.POSS-DAT electricity take-CVB come-NMLZ for

「彼が我々の村に電気を持って来るために…」

(http://www.ziyouz.com/index.php?option=com_content&task=view&id=6308)

- (8) *Safar Abdullayev [meni] [aldo-v] yol-i bilan ol-ib ket-il-ib,...*

PN 1SG.ACC cheat-NMLZ way-3SG.POSS with take-CVB leave-PASS-CVB

「サファル・アブドゥラエフが私をだます手段と共に連れていかれて、」

(<http://turonzamin.org/2011/04/19/shuhrat-ahmadjonov-12/>)

3.1.2. 態が保持されている例

ウズベク語には受動・使役・相互・中動態が存在する (表を参照されたい)。本稿では生産性が高い受動と使役の例のみ挙げる。なお、3.1.2.節では、態を表す接辞に囲み線を付す。

3.1.2.1. 受動態が保持されている例

コーパスには、-(u)v 動作名詞において受動であると判断できる用例はなかった。これは

受動接辞と自動詞形成接辞が同形式であり (Boeschoten 1998: 364)、かつ必ずしもその二者の境界が明白ではないためである。次節の使役接辞と他動詞形成接辞についても同様である。以下でまず屈折要素である形動詞の例を挙げる。本節では、主に受動が作りやすく使用頻度が高いと考えられる動詞 *ayt-*「言う」を用いて検索を行う。

- (9) *Qozog'iston-ning javob chora-lar-i borasida aniq taklif-lar*
 Kazakhstan-GEN answer way-PL-3SG.POSS about exact proposal-PL

ayt-il-gan-i yo'q.
 say-PASS-PTCP.PST-3SG.POSS no

「カザフスタンの返答方法について正確な提案がなされた (lit. 言われた) ことはない」
 (http://www.bbc.co.uk/uzbek/lotin/2013/07/130731_latin_kazakh_uzbek_tax_war.shtml)

次に、受動態が保持されている動作名詞の例を示す。-(u)v を除く 3 つの動作名詞で受動態が保持されていることが確認できる。

- (10) [*inson-lar-ga habar ber-il-ish-i-ni*]...
 person-PL-DAT news give-PASS-NMLZ-3SG.POSS-ACC

「人々にニュースが知られることを…」

(<http://www.ozodlik.org/content/article/2003115.html>)

- (11) *xavfsizlik sabab [ism-i ayt-il-maslig-i-ni] xohla-di-φ.*
 safe reason name-3SG.POSS say-PASS-NMLZ.NEG-3SG.POSS-ACC want-PST-3SG

「彼は、安全上の理由で、自分の名前が公開されない (lit. 言われぬ) ことを望む。」

(<http://www.ozodlik.org/content/article/24476488.html>)

- (12) [*shaxsiy qarash-lar ayt-il-mog'-i] kerak,*
 individual outlook-NMLZ-PL say-PASS-NMLZ-3SG.POSS necessary

「それぞれの見解が出され (lit. 言われ) なければならない、」

(http://www.ziyouz.com/index.php?option=com_content&task=view&id=5826)

さらに、(10) の接辞 *-ish* を空欄にして、インフォーマントに 4 つの動作名詞接辞のいずれが使えるかどうかを尋ねた。その結果、-(u)v は使えず、-*moq* は使えなくはないが古いように感じられるとの回答を得た。この回答に関しては次節末で再度言及する。

3.1.2.2. 使役態が保持されている例

受動態と同様、コーパスには *-moq*, *-(u)v* による動作名詞において使役と判断できる用例はなかった。まず屈折要素である形動詞の例を挙げる。

- (13) 4 *dindor ... bomdod azon-i-ni muddat-i-dan avval*
four religious pre.dawn pray-3SG.POSS time-3SG.POSS-ABL before

ayt-tir-gan-i *uchun...*
say-CAUS-PTCP.PST-3SG.POSS for

「4 人の敬虔な信者たちが…夜明け前の祈りをその時間より前に行わせた (lit. 言わせた) ために」
(<http://www.ozodlik.org/content/article/2249215.html>)

次に、使役態が保持されている動作名詞の例を示す。二つの動作名詞で使役態が保持されていることが確認できる。

- (14) *Qo'sh+fuqarolik [O'zbekiston fuqaro-si-ga muammo*
double+citizenship PN citizen-3SG.POSS-DAT problem

tug'-dir-ish-i] *mumkin=mi?*
born-CAUS-NMLZ-3SG.POSS possible=Q

「二重国籍がウズベキスタン国民に問題を生ませるかもしれないのか？」
(<http://www.ozodlik.org/content/article/25153085.html>)

- (15) *O'zbekiston rasmiy-lar-i [G'afur Rahimov-ni Olimpiada-ga kel-tir-maslik]*
Uzbeksitan official-PL-3SG.POSS PN PN-ACC Olympic-DAT come-CAUS-NMLZ.NEG

borasida ...
about

「ウズベキスタンの役人たちは、ガフル・ラヒモフをオリンピックに行かせないことに関して…」
(<http://www.ozodlik.org/content/article/25235236.html>)

さらに、(14) の動作名詞接辞 *-ish* を空欄にして、インフォーマントに4つの動作名詞接辞のいずれが使えるかを尋ねたところ、受動と同じ回答 (*-(u)v* は使えず、*-moq* は使えなくはないが古いように感じられる) を得た。

以上から、*-(u)v* と *-moq* は、*-(i)sh* や *-maslik* よりも、付くことのできる動詞語幹に制限がある、つまり生産性が低いことが明らかとなった。

3.2. 名詞への再範疇化

名詞への再範疇化が起こった結果、非派生名詞と同様に、複数・所有人称・格の順で接辞が接続される。具体例は 1.2. 節を参照されたい。次に-(i)sh, -maslik, -moq, -(u)v に複数・所有人称・格が付される例を挙げる。なお、本節では、複数・所有人称・格に囲み線を付す。

(16) *Madrid-dagi-lar [pul-ni qaytar-ib ol-ish-[lar-i-ga]]*...

PN-ADJLZ-PL money-ACC return-CVB take-NMLZ-PL-3SG.POSS-DAT

「マドリードに住んでいる人々はお金を返してくれることを…」

(<http://www.manutd.uz/news/1017/>)

(17) ... *deb ko'r-maslik-[lar-i-ni]* bildir-gan=di- ϕ .

QUOT see-NMLZ.NEG-PL-3SG.POSS-ACC inform-PTCP.PST=COP.PST-3SG

「…と会わないことを知らせた。」

(http://www.bbc.co.uk/uzbek/uzbekistan/2010/12/101221_latin_karimov_afghanistan.shtml)

(18) *[ishtchi-lar-imiz-ning shu masala-ga jiddiy-roq qara-moq-[lar-i-ni]]*...

worker-PL-1PL.POSS-GEN that problem-DAT serious-COMP see-NMLZ-PL-3SG.POSS-ACC

「我々は労働者たちがその問題をより真剣に捉えることを…」

(http://www.ziyouz.com/index.php?option=com_content&task=view&id=5073&Itemid=372)

(19) *[siyosat-ning nozik aldo-v-[lar-i-ga]] ko'p-roq qiziq-di- ϕ .*

politics-GEN delicate cheat-NMLZ-PL-3SG.POSS-DAT many-COMP interest-PST-3SG

「彼は政治の繊細な騙しに非常に興味がある。」

(http://www.ziyouz.com/index.php?option=com_content&task=view&id=1591)

4. 考察

3 節での検証の結果、以下の図 1 と図 2 のような結果が得られた。

	-VAL >> -VOICE >> -ASPECT >> -TENSE >> -MOOD >> -AGRs >> -IF
形動詞	----->
-(i)sh	----->
-maslik	----->
-moq	----->
-(u)v	----->

図 1: 動詞の脱範疇化階層

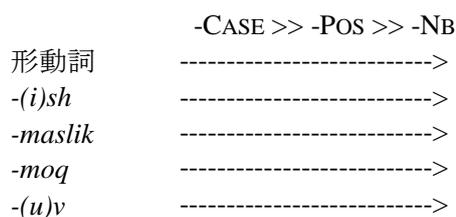


図 2: 名詞への再範疇化階層

これらの図から、全ての動作名詞は対格項を保持し、一部の動作名詞は受動態・使役態も保持するという点で通常の派生名詞とは異なる性質を持っていることが明らかとなった。さらに、これらの動作名詞は (3) で示した屈折の定義 (「規則的・一般的・生産的」) にも合致する。したがって、ウズベク語の動作名詞は Haspelmath (1996) のいう「語類転換屈折」に相当するものであると考えられる。

さらに、3.1.2 節で行った空欄補充調査の結果 Bodrogligeti (2003: 569) とは異なる見解を示すことができる。Bodrogligeti (2003: 569) では、-(i)sh, -(u)v は「語彙の一部」であるとしているのに対して -moq, -maslik は「動詞屈折」に属するとしている (表 5 参照)。しかし、図 1 を見ると、-moq, -(u)v では動詞的性質が比較的保持されていないことがわかる。このことより、Bodrogligeti (2003: 569) では -moq, -maslik を動詞屈折とみなしているが、-moq はより派生名詞らしくなっていることが明らかとなった。なぜならば、3.1.2.2 節で動作名詞は使役態が取れないことを示したためである。

4. おわりに

本稿では、ウズベク語の -(i)sh, -maslik, -moq, -(u)v から成る 4 つの動作名詞について次の二点を明らかにした。

- ① 動作名詞は「派生」ではなく「語類転換屈折」形式 (Haspelmath 1996) であること。
- ② それぞれの持つ動詞的性質が異なること (ただし、-(i)sh と -maslik は否定以外同じ動詞的性質を保つ)。

今後は、Malchukov (2006) の階層にかかわらず、ウズベク語の非派生名詞と比較対照を行いながら、これらの動作名詞についてより詳しく考察・分析を行う。

略号一覧

ADJLZ (adjectivalizer) 形容詞化 / COMP (comparative) 比較級 / PN (proper noun) 固有名詞

参考文献

Bodrogligeti, András J. E. (2003) *An Academic Grammar of Modern Literary Uzbek*. München: LINCROM EUROPA.

- Boeschoten, Hendrik (1998) Uzbek. Johanson, Lars and Éva Á. Csató (eds.) *The Turkic Languages*. 357–78. London, New York: Routledge.
- Haspelmath, Martin (1996) Word-class-changing inflection and morphological theory. Geert Booij & Jaap van Marle (eds.) *Yearbook of Morphology 1995*. Dordrecht: Kluwer. 43–66.
- Кононов, А. Н. (1960) *Грамматика современного Узбекского литературного языка*. Москва, Ленинград: Издательство академии наук СССР.
- Kortjevskaja-Tamm, Maria (1993) *Nominalizations*. London: Routledge.
- Malchukov, Andrej L. (2006) Constraining nominalization: function/form competition. *Linguistics* 44 (5): 973–1008.
- 庄垣内正弘 (1988) 「ウズベク語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 (第 1 卷 世界言語編 上)』 829-833. 東京: 三省堂
- Sjoberg, F. Andrée. (1963) *Uzbek Structural Grammar*. Uralic and Altaic Series, Vol.18 Indiana University, Bloomington.

Action nominals in Uzbek

HIDAKA, Shinsuke

(Doctoral candidate, Tokyo University of Foreign Studies / Research Fellow of JSPS)

Keywords: Uzbek, action nominal, inflection, derivation

In this paper, I discuss the question of whether action nominals in Uzbek is inflectional or derivational. The suffixes that form action nominals, following the definition by Koptjevskaja-Tamm (1993: 5), are *-(i)sh*, *-maslik*, *-moq*, and *-(u)v*. KOHOHOV (1960: 115–118) and Sjoberg (1963: 70–71) describe that action nominals formed by these suffixes are “nouns” or “derivational” nouns. On the other hand, Bodrogligeti (2003: 569) describes that *-(i)sh* and *-(u)v* belong to “part of the lexicon,” whereas *-moq* and *-maslik* belong to “the verbal inflection.”

I analyze Uzbek action nominals in terms of the two hierarchies of verb decategorization and recategorization to nouns proposed by Malchukov (2006), using the following procedure: First, I collect examples from an online search and a corpus. Especially, I collect the examples of action nominals retaining valency and voice. The data shows that the action nominals formed by *-moq* cannot retain causative voice, and those formed by *-(u)v* cannot retain causative and passive voice. In other words, *-moq* and *-(u)v* do not have a verbal nature. I therefore conclude that the four types of action nominals are formed by word-class-changing inflection (Haspelmath 1996).